

V-11 多スパン桁の振動

早大土木 正員 平嶋政治

実際橋梁においては桁の断面は順次変化するが、設計の第一段階におけるスパン割の決定には、まず等断面として固有振動数を算定しその動的特性の概要を把握し次いで設計断面による精密計算を行なうわけであるから等断面を有する多スパン桁（ゲルバー桁、連続桁等）の固有振動数と迅速に知る方法を述べ、次で一般多スパン桁（断面変化とする場合等を含む）の固有振動数を求める漸化式について述べる。

一般に、多スパン桁の端部は支持梁であり、中間梁はヒンジ梁又は支持梁である。従って端部スパンは、支持—支持又はヒンジ—支持であり、中間スパンは、支持—ヒンジ、ヒンジ—支持、ヒンジ—ヒンジ 又は 支持—支持 である。そこで、等断面多スパン桁の固有振動数を求めるには、これらの関係を接続条件に従って順次算定して行けばよいわけである。さて、行列式を整理すると次のようになる。

端部スパン：

$$2F_{S_i} = - \frac{ch_{S_i} S_{S_i} - sh_{S_i} C_{S_i}}{sh_{S_i} S_{S_i}}$$

中間スパン：

$$\left\{ \begin{array}{l} \text{支持—ヒンジ} \\ \text{ヒンジ—支持} \end{array} \right. 2F_{S_i} = \frac{2(ch_S C_S + 1) + (ch_S S_S - sh_S C_S) \cdot 2F_{S'}}{(ch_S S_S - sh_S C_S) - sh_S S_S \cdot 2F_{S'}}$$

$$\left\{ \begin{array}{l} \text{ヒンジ—ヒンジ} \\ \text{支持—支持} \end{array} \right. 2F_{S_i} = \frac{2(ch_S C_S - 1) + (ch_S S_S - sh_S C_S) \cdot 2F_{S'}}{(ch_S S_S - sh_S C_S) - sh_S S_S \cdot 2F_{S'}}$$

上記の漸化式により、容易に固有値を知ることが出来る。

なお、上式の算定に便利な、数表および図表は、早稲田大学理工学研究所報告（NO. 15.）に載せてある。

次で、桁の断面が変化する場合のうち、特に段階的に変化するとの漸化式を示す。

$$\text{対称型振動： } ch_1 S_1 \cdot F_1 + sh_1 C_1 \cdot F_2 + ch_2 C_2 \cdot F_3 + sh_2 S_2 \cdot F_4 = 0$$

$$\text{斜対称型振動： } sh_1 C_1 \cdot F_1 + ch_1 S_1 \cdot F_2 + sh_2 S_2 \cdot F_3 + ch_2 C_2 \cdot F_4 = 0$$

$$F_1 = (-\alpha_1 + \alpha_3)(1 + \alpha_2)\psi_1 - 2(1 + \alpha_2)\alpha_3\psi_3 + 2(-\alpha_1 + \alpha_3)\alpha_2\psi_4 + 4\alpha_2\alpha_3\psi_6$$

$$F_2 = (\alpha_1 + \alpha_3)(-1 + \alpha_2)\psi_1 + 2(1 - \alpha_2)\alpha_3\psi_3 + 2(\alpha_1 + \alpha_3)\alpha_2\psi_4 + 4\alpha_2\alpha_3\psi_6$$

$$F_3 = 4\alpha_2\psi_2$$

$$F_4 = -4\alpha_1\alpha_3\psi_5$$

$$\alpha_1 = \bar{k}_1 / \bar{k}_2 \quad \alpha_2 = (E_1 I_1 / E_2 I_2) (\bar{k}_1 / \bar{k}_2)^2 \quad \alpha_3 = (E_1 I_1 / E_2 I_2) (\bar{k}_1 / \bar{k}_2)^3$$

$$\bar{k}_i = (p^2 A_i \gamma_i / E_i I_i)^{\frac{1}{4}}$$

$$\psi_1 = \psi_{s+7, 6+8}$$

$$\psi_2 = \psi_{s+7, 7}$$

$$\psi_3 = \psi_{s+7, 8}$$

$$\psi_4 = \psi_{6+8, 7}$$

$$\psi_5 = \psi_{6+8, 8}$$

$$\psi_6 = \psi_{7, 8}$$

$$\begin{aligned} \psi_{ij} = & \varphi_{ij} \{ (G+I)(H+J) \} \varphi_{9+11, 10+12} (KL) \\ & - 2 \varphi_{ij} \{ (G+I) \cdot I \} \varphi_{9+11, 11} (KL) \\ & - 2 \varphi_{ij} \{ (G+I) \cdot J \} \varphi_{9+11, 12} (KL) \\ & - 2 \varphi_{ij} \{ (H+J) \cdot I \} \varphi_{10+12, 11} (KL) \\ & - 2 \varphi_{ij} \{ (H+J) \cdot J \} \varphi_{10+12, 12} (KL) \\ & - 2 \varphi_{ij} \{ I \cdot J \} \varphi_{11, 12} (KL) \end{aligned}$$

接續点の支持点である場合

$$\psi_{ij} = 2\varphi_{ij}(GH)\varphi_{10, 12+10}(KL) - \varphi_{ij}(GI)\varphi_{11+9, 12+10}(KL)$$

接續点のヒンジである場合

$$\psi_{ij} = \varphi_{ij}(GH)\varphi_{11+9, 12+10}(KL) + 2\varphi_{ij}(GI)\varphi_{10, 12+10}(KL)$$

これらの式を順次適用して、一般多スパン桁の固有値を漸化的に求めることができる。